

戦争させない市民の風・北海道第4回定期総会

議題1. 活動報告と今後の方針 提案後に出された意見(概要)

日時 2019年11月24日(日) 13:30~16:30

場所 札幌エルプラザ2階 環境研修室1・2

出席者 43名

議長 佐々木栄二

公平(選挙チーム)

(配布資料「次期衆院選に向けた『戦争させない市民の風・北海道』への提言」に沿って説明)

野党がバラバラだと1議席分の死票が出てしまう。比例でも野党が共闘することを野党各党に要請してはどうか。最も望ましいのは立・国・社・共産・れいわの全野党による統一名簿だが、「立・国・社」と「共産・れいわ」でそれぞれ統一名簿を作ってもよい。政党間の調整は参院比例と違い北海道内だけでOK。既存政党は解散せず、そのまま残すことができる。

斉藤(選挙チーム)

あるいは立民の候補を立・国・社が応援し、共産の候補者をれいわも応援するという形も考えられる。

霧(北広島)

それは難しい。国民の目線に立っていない。憲法や安保法制では投票しない。有権者が何を基準に投票しているかのデータは出ているのに、訴えることが有権者の投票動機とずれている。それでは勝てるわけがない。勝てなきゃ意味がない。松尾匡さんの「反緊縮マニフェスト」などを参考にしながらやっていくことが大事。

竹ノ内(選挙チーム)

選挙チームが熱くしゃべりすぎて、こうじゃないといけないと言っているように聞こえてしまうんじゃないかと心配だ。そうではない。比例区についてはこれまでハードルが高すぎてあきらめていたが、それではこれ以上議席を増やすことができない。消費税の問題などがあって野党全部が一体となることは難しい。立・国・社は社会保障との関連で消費税引き下げはとんでもないだろう。共産・れいわは、れいわは消費税を上げることに同意すると存在理由がなくなり難しい。全部一体にこだわり過ぎてはうまく行かない。そうであれば二つに分かれることを考えると少しは幅が広まる。

二つに分けることにはデメリットもある。下手をすれば立憲と共産の溝を深める。

市民の風がれいわを排除する方に行くことを心配している。れいわは選挙に行かない人に

働きかけている。それを切り捨ててはいけない。

必ずしも統一名簿で、というわけではない。統一名簿ということになると新しい名前を浸透させなければならない。全部か、バラバラか、ではなくて、他の選択もあるよ、という提案だ。

中村（10区）

活動方針としての提案か。

公平（選挙チーム）

そうではない。我々は票を集める力はないが政党をつなげる力はある。市民の風の働きかけで政党間の繋がりを強めることができるかもしれないということだ。

中村（10区）

選挙戦術の話の前に活動方針について話した方がいいのではないか。

川原

私からの提案を補強する意見と受け止めている。

渡辺（10区）

10区の会として、選挙がいつあるか分からない情勢の中で、各政党との懇談会などを重ねて準備を進めてきた。市民が活動して一つでも共闘の場を作っていくことが必要。

ライブ隊は最近、地方で歌声喫茶などをやっている。札幌でも桜を見る会の寸劇をやってみたい。

大平（手稲）

「平和っていい～ね ていね市民の会」では毎週、朝と夕交互にスタンディング、3日と9日に合同街宣、選挙期間中は毎日スタンディング、最終日には24時までスタンディング、他に5月3日には集会とデモをやっている。これだけやっても投票率、得票率があがらない。

しかし、町内会の歩こう会に参加したら「大平さん、いつも頑張ってますもんね」と言われた。ずっとやっているのを見ている。無駄ではない。

新幹線の掘削有害土受け入れ反対の運動でも、新幹線反対、トンネルを掘るなどということは言っていないのだけれど、運動をやっているとどうしても反自民になる。住民からそういう声ができるようになる。FBをやってきて知らない人から「大平さんじゃないですか」と声がかかる。地域から信頼関係を作っていくことが大切。時間はかかるけれど。

岩佐（江別）

参院選で3人は難しいという声があがったが、どういう形にしたら良いのか知恵をださな

ければならない。勝つためにひくところはひかなければと思う。

市民の風が「あんたら何票もってるんだ」と言われると聞いたが、それを乗り越えて生活に密着した演説も、自己反省も含めてやっていかなければならない。本当に接着剤になれるようにやっていきたい。

江別では知事選のときに石川さんを押し上げたいと思い、大型店舗前で街宣をやって投票率が少し上がった。これまでやってきたことが結びついた。

岩崎（中央区）

参院選での戦略的投票の呼びかけについて。革新懇ではイベント毎に国民の徳永さんにプライベートメッセージで連絡し、参加してくれていたが、参院選以降、参加してくれなくなった。小林さんは徳永さんに了解をとったと言っていたが、未だにこだわりをもっている。国民との関係が改善されないと困る。何らかの手を打ってもらいたい。

川原

国民にしてみれば原谷さんに推薦を出しているながら、ということがある。

参院選後徳永さんのところに挨拶に行った。各党の幹事長会談をこれから続けていく予定だ。そこに国民からも入ってもらってやっていくことになっている。国民との関係修復に努力したい。

？

次の選挙でれいわが食い込んでくると思う。他の政党は自分たちの支持率が上がらない理由が分かっていない。だから新しいところに賭けようという動きが出てくる。

山口

私たちは市民運動なので、政党の下請けではなく下から政治を作りかえることが大事。政党同士の接着剤としての努力は必要だが、半数の投票に行かない人への働きかけと、両方やっていくのが市民運動だ。

公平（選挙チーム）

北広島の方に反論。れいわの支持率は平均1%程度だ。

河瀬（選挙チーム）

3年前、森友学園の問題が起きるまで政治に関心がなかった。その時までの自分が路上でやっていることを見ようと思うとすれば、動機は「楽しい」「面白い」だ。ギターの弾き語りや大道芸をやっていれば自然と見に行く。変装とか、エア弾き語りとか、つかみ・冒頭だけでいいので人を寄せて「実は…」とやれば多少なりとも変化がある。

田中（白石）

北広島の方に対する公平さんの意見に反論。れいわが報じられないのは辺野古のことがあったから。支持率が1%に満たないのはそういうこと。自分は共産党にもかかわり、れいわにもかかわっているが、それはれいわが生活に密着したことを言っているからだ。れいわは安保法制もスルーしていない。緊急政策の8つ目に原発のことも入れている。今まで選挙に行かなかった人へのアプローチをしている。

夢のあるスローガン、若い人の経済問題に訴えるスローガンが必要だ。

佐々木（由仁9条の会）

貧困問題、新幹線残土問題、教師の過重労働、英語民間試験のベネッセの問題など、市民の風として身近な問題をやっていくべきだ。野党だけでなく、市民の会も応えていない。

かがみ（十勝）

会員にれいわを支持している人が複数いる。今日は、市民の風としてはれいわをどう扱うのか、きちんと聞いてくるからと言って来た。山本太郎が帯広駅北口に来た時に600人集まった。見たことのない人がいっぱい来た。就職氷河期の40代、50代の人たちがじっと聞いている。石川香織さん、市川ともひろさんも来て、邪魔にならないように端の方で聞いていた。

岩佐（江別）

消費税のことは前の総会で入れるべきだと言ったが受け入れられなかった。消費税は不公正な税制だ。政策に入れて訴えていかなければならない。

れいわはすごい勢いだ。消費税反対は国民に受けてきたと考える。

3党合意時の党はなくなったのだから、それに縛られることはない。

鈴木（選挙チーム）

（投票割引の説明、SNSの活用について）〈受付業務でメモができず、すみません〉

小林

色々なアイデアを出して、言い出しっぺからやろう。

鳴海（小樽）

安保・憲法では投票に行かないという意見があったが、安保・憲法は重要だ。軍備に予算をつけるために消費税をあげ、福祉を削る。安保・憲法とそれ以外の政策はイコールだ。ただ、アプローチの工夫は必要だ。れいわは私たちと違う人たちではない。山本太郎の言葉には力がある。私たちも工夫しなければならない。

織本（西区）

統一候補はできたほうがいいが政策合意の中身が不鮮明で、大枠の中身についてもよくわからない。「ああ、ここはしっかりやるんだ」と実感したい。統一候補にこだわると民主主義は排除を伴うが、十分に中身を話し合わなければならない。

自治労とJPが行ったアンケートで、支持が一番多かったのが自民党だった、自治労・JPはショックを受けている。今は上から指示しても労働組合は動かない。一人ひとりの意識の高まり、やる気をどう作るか、その引き出し方を含めて統一候補の問題は十分話し合った方がいいのではないかな。

川原

比例について検討し研究を進めたい。私たちも考え、政党にも一緒に考えてもらう。

政策についての研究・協議を進めたい。経済・安保・外交の研究をし、市民レベルの考えを政党に投げかける。

れいわについては共闘から排除をする姿勢ではない。一緒にやっていく仲間だと思う。

ただ、れいわは対応の窓口が見えない。他政党は地元で窓口がある。市民連合も山本太郎としか連絡できないと言っている。その点はれいわも考えてほしい。

ただ、市民の風はれいわの選挙運動を直接はできない。それは含んでほしい。

投票率の向上のために様々なアイデアを出して、SNSや投票割引を含めてやっていきたい。

まずは自分が、まずは地域で、やれることを呼び掛けてほしい。そして市民の風でやれることは一緒にやっていきたい。